



■ フォトエッセイ ■

# 南アフリカ・ヨハネスブルグの チャイナタウン —20年今昔物語—

写真・文 吉田 栄一  
Yoshida Eiichi

プロンコスプリイトには1992年に台湾より仏教寺院南華寺が誘致された（2002年竣工）

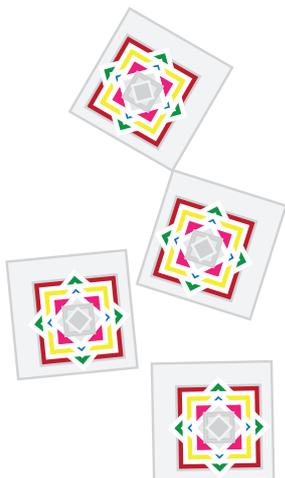
二〇年前大学院生の頃、私は三年四月南アフリカに居住していた。研究テーマは「アパルトヘイト体制における黒人居住区の開発問題」であったはずだが、南アフリカに到着早々、恐らく翌週末だっただろうか「ヨハネスブルグにチャイナタウンがある」とときき、私の足は早速チャイナタウンに向かっていた。

そのチャイナタウンは、今日オールドチャイナタウンと呼ばれている。住んでいたプレトリアからは車で四〇分ほど。プレトリアーヨハネスブルグ間の高速道路を降りて、カージヤック（車両強盗）に狙われないように危険なヒルブロウの坂を猛スピードで駆け下り、アフリカ一のカールトンタワー横を抜けると道の両脇に漢字の看板がパラパラと見えてくる。そこは中華街の牌楼（楼門）もない小さなチャイナタウンだった。

ヨハネスブルグでチャイナタウンに興味を持ったのは生活上の必要性もある。ここでは日本人経営の食材店より安く味噌、醤油や冷凍食品が購入できた。日本のパッケージデザインそっくりの菓子や飲料（台湾製だったと思われる）も購入できた。それに学生時代、第一外国語に中国語を選択し、中国同好会メンバーでもあった「中国好きなら」なればこそアフリカカンチャイニーズを知らねばと思ったこともあった。

オールドチャイナタウンには一〇〇年前、一八〇の店舗や事務所が軒を連ねていたそうであるが、二〇年前には十分に縮小してしまっていた。それでも「台北人超市（スーパー）」、「瑞興行商店」 「杜省（トランスバル州）中華會館」 「華郁旅行社」など馴染みの店を含めて三〇軒あまり

オールドチャイナタウンの店舗は閉鎖され空き店舗が増えた。燕子酒家（スワローインレストラン）は70年の歴史を持つ銘店



はあっただろうか。当時、南アフリカは台湾との外交関係があり、台湾人移民や台湾人留学生が多く、一旗揚げようと就航したばかりのチャイナエアラインに乗ってくる人も多かったように思う。私はチャイナタウンに通って、中国系コミュニティの旧正月や一〇月一〇日の雙十節、野球大会やミスチャイナ・サウスアフリカ（世界の中国系ミスコンテスト南アフリカ予選）に顔を出した。

中国系コミュニティの友人たちの喋る英語はジョーバーク・アクセント（ヨハネスブルグなまり）のイギリス系南ア人のそれと同じものであった。聞くとそこら彼らはイギリス系の中学高校に通い、ケープタウン大学やウィットウォーターズランド大学といった国内トップ大学を卒業して各界で活躍していた。友人らを通して見ると中国系社会はカラードやインド系より白人社会に同化しているようにしかみえなかった。しかしながら彼らの住まいを訪ねてみるとその親、祖父母世代は人種混住地区の簡素な家に住んでおり、子孫の白人社会同化にいたる道のりが推し量られた。

ヨハネスブルグでは二〇世紀はじめに都心のマーケットスクエアから北西と西側に向かって墓地や衛生処理施設とともに、アジア系、カラード、黒人の小規模な居住地がレイアウトされ、オールドチャイナタウンはこのアジア系・カラード地区と都心街区を結ぶ場所に形成されている。その後、時を経て子、孫の世代は都心東の白人混住地区へと静かに移動し始める。まず東に隣接するドーンフォントェイン、そしてその東隣に開発されたビズデンホートバレー、ケンジントン、ベッドフォードビューなどのユダヤ系と南欧系の多い地区へと定住していった。南アフリカのまちづくりに風水は関係ないと思うが、ヨハネスブルグでもプレト



左手は市によって建築遺産に指定された南アフリカトランスバル中国人連合クラブ、奥の青いビルは反アパルトヘイト活動家が収監、60人が虐待死に至ったとされるヨハネスブルグ警察本部「ジョンフォスタースクエア」。警察本部は都心隣接の非白人地区とビジネスエリアの分断を見張る櫓のようにも見えた

ヨハネスブルグ都心に近い、オールドチャイナタウンの象徴である旧トランスバル州中華会館、1943年創業の瑞興行商店の青い看板、そして2010年に設置された龍の塔

プレトリアの東約50キロのbroncospruitには台湾系移民の投資を見込んだ不動産開発が進んだ

broncospruitの街路には中国語の名称が付されている



リアでも日本と逆に都心西側の評価は東側に比べて低めである。友人の三世四世はこのような混住地区育ちが多かった。

これら老華僑とその子孫がアパルトヘイトと共に生き、またアパルトヘイト都市のなかで息をひそめて生きてきたのに対して、台湾系移民の扱いは格段に異なった。旧国民党政権から歓迎され、居住地区分では名誉白人の扱いを受け、ヨハネスブルグのサントン、プレトリアのブルックリン、ケープタウンのシーポイントなど富裕地区に居住している者も少なくなかった。台湾系の不動産購買力の高さはデベロッパの関心をひき、九〇年前後には移民向けの不動産開発構想が南アの各地で生まれた。クイーンズタウン、スプリングス、ブラックパン、なかでもプレトリアから東へ五〇キロのbroncospruitは台湾系移民向けの不動産開発が具体化した。またプレトリアの南に隣接するフルヴァルトバーク（現センチュリオン）は香港系移民向け、ヨハネスブルグ南郊のリーフェンフレーデでも不動産開発の六割を台湾系向けに販売する計画がたてられた。

そこで、今回の調査でbroncospruitに行ってみた。その中心には巨大な仏教寺院がそびえ立っていた。台湾高雄の仏光山の分院南華寺である。仏教学校「アフリカ仏学院」や博物館も併設されていて袈裟を羽織った黒人僧侶が中国語を操っているのに感心した。なかを一回りして食堂で湯麺の昼食をとっていると中国語で話しかけられた。たどたどしく返すと、プレトリアに住む高齢の台湾人女性で毎週奉仕作業に来ているとのこと。その女性の紹介で僧侶にもお会いし仏光山本山に関する分厚い本をいただいた。

実は二〇年前にも、台湾人の友人を訪ねてbronco



ヨハネスブルグ東郊シリルディンのニューチャイナタウンは住宅地商店街に生まれた。初期の店舗は集合住宅の1階に並ぶ



専門は地域振興論、都市研究。1991年から94年にかけてアパルトヘイト末期の南アフリカに滞在し、黒人社会支援に従事した。近年はアフリカの中国人ビジネスと現地商人の競合に注目している。



ニューチャイナタウンの象徴となる楼門も2012年に完成予定



路上には、シリルディン中華街管理委員会が衛生管理などのコンプライアンスを呼びかける看板



街路中央の戸建ゾーンは店舗用途に建て替えが進む。行政手続き事務所や同業者組合も増えた。これら中国風デザインの建物は土地利用法、建築法規を超えてしまうこともしばしばで都市計画局を困らせている

スプリットに行ったことがあった。鉾山会社の社宅がならぶ田舎町にしかみえなかったのだが、当時台湾企業の誘致拠点であった工場団地（クワンデベレホームランドの飛び地）にも近く、台湾人居住者がいた。町では台湾人の投資拡大と移民増加を見越して二km×1kmほどのサバンナが宅地開発され、中心に仏教寺院が誘致されたのである。区画街路には中国語名称までふられて準備が整ったところで台湾と国交が絶たれ、投資、移民は激減した。現在は空地、空き家だらけになっている。

ブロンコスプリットから車を飛ばして約一時間でヨハネスブルグの新しいチャイナタウンに着く。五〇〇メートルの通りに中華食材店、スーパー、鮮魚、各省料理、台湾風喫茶、書店、建築事務所、ネットカフェ、診療所、歯科医、旅館、下宿、不動産仲介、タイ料理まで並ぶ。この周辺に中国系が三万人住むといわれている。調査中にお世話になった旅館もこのなかにあり、そこから数歩の軽食店は朝六時から営業中。マントウ、豆乳、油条（揚げパン）、茶葉蛋（煮卵）の朝食が二〇ランド（一八〇円）ほどだ。労働者風の男性が無言で同席、豆乳に揚げパンを突っ込んで頬張り、急いで出勤していく。店の壁には求人広告が多く、不動産、タクシーなどの広告も張られている。私の馴染みであった台北人超市（スーパー）や旅行代理店も危険な都心からこちらに移転していたが、経営者の友人は帰国していた。今回の調査中に、三世、四世の友人らの多くは、民主化と移行期に将来を不安に思い一九九〇年代後半に国外へ出たと分かった。

遺産のようにのこされた台湾寺院とオールドチャイナタウンの空虚な空間を見ながら、アパルトヘイトを生きぬき、また移民社会に生き続ける友人達のたくましい生き様に敬意と憧憬を抱くのであった。